「一人ひとりのよさを伸ばす学級づくりをめざして」
ー　未来社会を形成する人づくりの基盤となる社会性の育成　ー

秩父市立影森中学校

１　本校の基本理念

昨今、社会は猛烈な勢いで変化し続けている。今の中学生たちが大人になるまでには、人々の価値観や生活スタイル、働き方にいたるまで、どのように変容しているのか想像すらつかない。その中にあり、これらの変化に敏感に、しかも、しなやかに対応し生き抜く力を身につけさせなければならない。そして生徒ひとり一人が将来、より幸せに自己実現をはかり、よりよい社会をつくるための力を育むことが学校の役割である。このように、未来社会からの留学生（次世代の人材）を育成していくことが、本校校長の基本理念である。この基本理念の下に、今年度は特別活動を研修主題に据え、全教職員一丸となって研修に励んできた。

２　研修主題について

授業を実施する基本単位は学級であり、授業規律は学級経営の充実で確立される。上記の理念と経営方針の下、本年度は研修テーマを「学級づくり」に設定し、全教職員が生徒主体の学校行事と学級づくりに取り組んできた。

本校では校内研修を“学校の課題解決の場所”と位置づけており、年間を通じて学級の問題点を徹底的に洗い出し、課題を浮き彫りにして解決策を協議してきた。その中でも特に重点的に取り組んだのは、生徒を前面にだす、いわゆる「生徒主体の学校行事」と「スピーチ力の向上」である。以下にこの２点の実践を記す。

３　実践報告

（１）生徒主体の学校行事

ア　運動会の取組から

「生徒主体の学校行事」づくりを通して、個のよさを引き出し、自己チェック能力を向上させ、学びの意欲化を図る。自己チェック能力の向上とは、生徒に自信と達成感を与え、自分自身の行動を振り返りながら、更によりよいものを作り上げようとする向上心を芽生えさせることである。高めた自己チェック能力を、そのまま学級づくりや学習活動へとつなげることが、学校行事を充実させる真の狙いである。

生徒主体の運動会にするために我々が共通認識をしたことは、まずは教員が大いにやって見せ、言って聞かせることである。つまり、はじめは教員自身が良きモデルを示し、次に実際に生徒にやらせて、良いところは充分に褒めて認める。この繰り返しが最終的に主体的に動く生徒を作り出し、学級づくりの基盤である、一人ひとりの個の育成へとつながった。

閉会後大きな輪を作り、大成功の喜びを分かち合う

このことを全教職員が徹底して実行するために、第１回運動会練習直後に研修会を実施した。運動会では、実行委員（生徒）が計画した練習プログラムに基づき進めていくが、当然そこには多くの課題が発生し、教師が指導しなければならない事柄が存在する。研修会では、その辺りの指導のさじ加減や生徒への関わりの程度、また今後の見通しを充分に話し合い、全員が同じ目線で指導に当たれるよう、共通理解を徹底した。

イ　文化祭の取組から（点から線へ、線から面への取組）

縦割り色別の運動会では、敵味方に分かれて競い合ったクラスの仲間が、それぞれの団で培ったものを各学級に持ち帰り、学級の基盤はできあがった。ここでもう一度、運動会での指導体制（点の取組）を徹底的に評価・反省し、新たな課題を共有認識した。そして、運動会での成果と課題を文化祭につなげる（取組を線に）ための具体的方策を出し合い、次なる指導体制は確立した。

①各学級担任が、文化祭を通じて成長する生徒の姿を明確にイメージすること。

②教師自身が、今後の見通しを持った上で指導すること。

これらが文化祭指導における基本的な共有事項である。ちなみに本校では、文化祭や体育祭以外の行事でも、職員反省を研修会テーマとして取り扱い、成果と課題について毎回充分な協議を行っている。このことで生徒への指導に一貫性が生まれ、点から線、そして面への取組となった。

（２）スピーチ力の向上

本校では言語活動充実の一環として、全学級で「１分間スピーチ」に取り組んでいる。実施方法は学級ごとに若干異なるが、生徒が輪番で原稿を準備し、発表する形態が主である。校内研修では、「１分間スピーチ」にスポットを当て、各学級での取り組み方法や、スピーチに取り組ませるねらいについて協議した。「スピーチ活動を通して育ませたい能力」を問う、教職員への事前アンケートでは“話す力（伝える力）”と“聴く力（理解する力）”の２点が最も多く挙げられ、これらの力をいかにして育むかが、協議の中心となった。

“話す力（伝える力）”を高めるためには、①声の大きさや速さ、緩急、目線、表情などの話術と、②自分の考えをまとめる、整理する、論理的に組み立てるなどの文章構築力をバランスよくトレーニングしていかなければならない。一方“聴く力（理解する力）”を高めるための第一条件として、③学級の規律がしっかりしていなければならない。まずは発表時の約束事（静かな環境、発表者に集中する、どんな考えでも受け止める、発表後拍手を送る等）を守らせることが教師の努めであり、これは各教科の授業規律へとつながる大事な要素である。

これらのことを教職員同士が共通理解し、成果の発表と検証の場として、１学期終業式や文化祭で、１分間スピーチコンテストを実施した。

文化祭での１分間スピーチコンテスト

４　成果と課題

（１）校内で足並みをそろえて、生徒への積極的な指導に当たるために、本校では実践事例をテーマに取り上げ、分科会方式やワークショップ方式を有効活用し、充分に協議を積み重ねて進めてきた。特に学校行事を実施する際には、その行事の前後に校内研修を設定し、行事を通して生徒に育ませる“ねらい”を明確にすると共に、成果と課題を徹底的に検証し、指導の方法や目指す方向性を何度も確認した。その結果、生徒は成功体験を得ることができ、自尊感情が高まると同時に、更に良いものを創り上げようとする向上心を芽生えさせることが出来た。

（２）「生徒主体」の学校行事では、教員が同じ目標を持ち、思いっきり手をかけて目を離さず、だんだんに手を離すことを全教職員が統一指導できたことで成功したと言える。実施計画と生徒の成長（高まり）を常に対比しながら、付かず離れずに生徒の活動を見届ける。これが学校全体でできつつある。

（３）一方で、本校が目指す「生徒主体」とは、一学校行事だけを成功させることではない。これはあくまで一つのきっかけであり、生徒が属する様々な組織（学級、部活動、委員会等）や場面（授業、清掃、学活、部活動）で「生徒主体」を体現させることが真のねらいである。授業には落ち着きがあり、かつ意欲的に取り組む本校生徒であるが、現状に満足せず、更なる頂を目指して、研修を重ねていきたい。

（担当　教諭　小泉　貴寛）

「基礎学力・学習意欲の向上を目指し、
互いに高め合う生徒の育成」

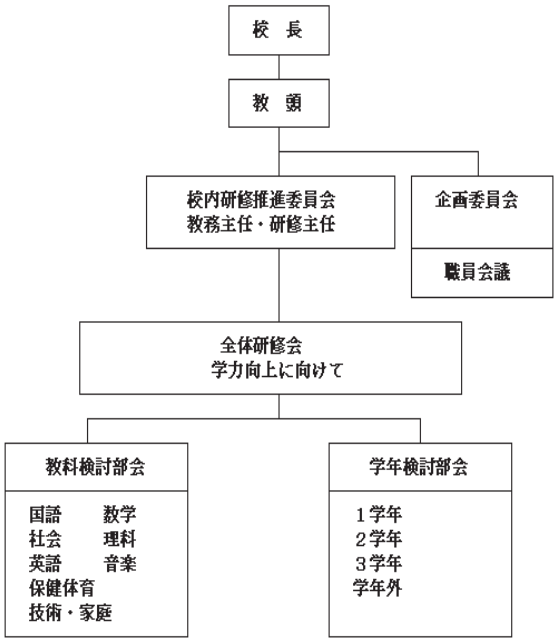
秩父市立吉田中学校

1　研究テーマについて

本校の生徒は穏やかな生徒が多く、部活動や伝統芸能学習などに積極的に取り組んでいる。反面、他校からの刺激が少ないため、学習意欲に欠けたり、家庭学習が不十分な生徒も多数見受けられる。また、各教科の学習を深化させるための基礎的な学力も十分ではなく、基礎学力の向上を望む声も多く聞かれる。そこで、学校教育目標の「学び、鍛え、高め合う生徒の育成」を鑑み、本年度も研究テーマを「基礎学力・学習意欲の向上を目指し、互いに高め合う生徒の育成」と設定し、昨年の実践を元に継続研究を行うこととした。本年度は、学習の手引きの活用、授業公開に加え、ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業の研究と指導法の改善に努め、わかる授業の実践に全教師で取り組むこととした。

【研究組織】

研修の組織



【全教師の授業公開実施計画】

授業公開

月	日	校時	クラス	教 科	氏 名	内　　容
6月 6/10～14 公開週間	10（月）	6	1－1	社会	**大谷**	「世界のすがた」 **要請訪問①**
7月						
9月	18（水） 19（木） 27（金）	4 1 6	2－2 2－2 2－1	英語 社会 理科	長谷川章 斉藤 新井	「Lesson　4　Enjoy　Sushi」 「世界の資源エネルギーと産業」 「刺激に対する反応」
10月	21（月） 22（火） 31（木）	4 3 1	3－2 1－1 2－1	音楽 体育 国語	関根 長尾 中山	「合唱」 「柔道」 「随筆の味わい」
11月 11/1～7 公開週間	12（火） 20（水）	5 6	1－2 1－2	数学 理科	荒木 **長谷川隼**	「比例と反比例」 「身のまわりの物質」 **要請訪問②**
12月	19（木）	1 3	1－2 3－2	英語 英語	倉林 猪野	「復習とコミュニケーション」 「背景を踏まえながらキング牧師の理解を深めよう」
1月 1/14～20 公開週間	16（木） 14（火） 29（水）	1 6 2	1－1 2－2 2－2	国語 数学 技家	有賀 中西 大沼	「三好達治の詩」 「証明」 「情報　ソフトウエアの活用」

2　具体的な取組

（1）ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業の実践

授業の流れが理解しやすく、誰にでもわかりやすい授業を目指し、全教科でユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業を公開した。具体的には次のようなポイントを心がけた。①本時の学習課題やねらいをしっかりと設定する。（ねらいをを明確にする）②どの生徒にもわかりやすい板書を心がけ提示する。視覚的な手がかりとしてねらいは校内で統一した色カードにする。（板書をわかりやすくする）生徒に色分けをしてノートをとらせる。③生徒同士の学び合いやペア学習を取り入れる。（様々な活動を取り入れる）

【学習の流れがわかる板書の工夫】

④発問をわかりやすくする。指示を工夫する。これらの取組を継続的に学校全体で実践していく。

（２）全教師による授業公開

授業力の向上を目指す観点から全教師による授業公開を実施し、授業を相互参観した。今年度は授業のポイントや見てほしい内容を事前に評価用紙に示し、参観者は評価用紙に記入し授業者に提出した。また、授業の情報交換会を定期的に開催して、授業の充実を図った。若い教師は授業参観を望んでおり、積極的に経験豊富なベテラン教師の授業を参観することにより指導法の工夫・改善へのきっかけとした。

【グループ活動を取り入れた授業】

（３）家庭学習の促進

家庭学習の状況や授業の理解度を測るため、学習アンケートを毎学期実施し、実態を把握した。また、生徒の基礎学力・学習意欲の向上を目指すため「学習の手引き」を各教科で作成し、全校活用説明会を行った。保護者会においても保護者への説明と手引きの紹介を行い、家庭での協力を求めた。授業ノートを家庭で復習に活用させ、教科及び学級担任は、宿題や家庭学習ノートの点検やスタディングマラソン等で家庭学習の定着化を図った。

【授業参観後の情報交換会と分析】

（４）小・中学校間の連携

吉田小・中学校間で授業の公開、情報交換会を行っている。小・中学校の要請訪問にそれぞれの教師が授業参観し、研究協議に参加した。秩父市学力向上推進協議会などを始め、小・中学校の情報交換会を４回行った。また、小学校に英語教師が出向き出前授業を行い、小学校教師と連携しティームティーチング形式で行った。今後は保体や音楽などの教科で実践する予定である。

【小学校での英語出前授業の様子】

３　成果と課題

（１）教師がユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業を研修することで、教材研究が活発になり授業が改善されつつある。今後ともどの生徒にもわかりやすいユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業改善を図る必要がある。

（２）学習アンケートで生徒の実態を把握し、学習状況調査や教育に関する３つの達成目標の分析を進めることで授業の課題を見つけ、家庭学習等の指導の充実につなげることができた。分析の結果を PDCA サイクルの検証により生徒にフィードバックすることで、今後も調査・分析・実践を繰り返すことが必要である。

（３）小・中学校間の連携については交流の体制が確立できた。今後は吉田地区の子どもを系統立てて育てるための支援体制を整備し、研修内容を充実していきたい。

（担当　主幹教諭　大沼修一）

「自ら考え自分の夢を語れる生徒の育成」
～生きる力を育むキャリア教育の充実を通して～

秩父市立大滝中学校

１　はじめに

本校は、全校生徒数１１名の埼玉県唯一のへき地中学校です。へき地・小規模学校の特色を生かした教育活動を推進するために校内研修を重ねています。

２　校内研修の主題

「自ら考え自分の夢を語れる生徒の育成」
～生きる力を育むキャリア教育の充実を通して～

３　校内研修の具体的な取組

（１）　自ら考え、基礎的・汎用的能力を高める授業の取組

ア　生徒の夢を育てる授業（教科・領域）の実践

a　理論研修

６月５日北部教育事務所秩父支所指導主事二ノ宮先生を指導者にして講義「キャリア教育と研究主題との関わりについて」をしていただく。

b　指導案の検討

５月２７日授業研究のための指導案の形式の検討を行うことにより、今年度の研究内容の共通理解を深めた。キャリア教育との関わりを明確にするために「校内研修の研究主題との関連」と「本時の展開にキャリア教育の視点を位置づける」ことを確認する。

c　研究授業と研究協議会

７月９日要請訪問として新井裕策教諭が数学で研究授業を行った。単元は「文字と式」。キャリア教育の視点に立って指導案を作成し、授業実践を行った。研究授業終了後、秩父市教育研究所指導主事新井先生を指導者としてお迎えし研究協議会を行った。

d　公開授業と授業研究会

２学期に各教科と領域で公開授業を行った。キャリア教育の視点に立って指導案を作成して授業を実践した。また、授業研究会を開き、特にキャリア教育との関わりについて協議を行った。研究会が開けない場合は授業参観者が授業評価や感想を記入し紙ベースで保存し、授業改善に生かした。

１０月１１日堀口明日香教諭が「上級学校を訪ねて」（道徳）の公開授業を行った。

１０月１５日内山一美教諭が２学年の「Lesson　6　Uluru」（英語）で公開授業を行った。

１０月１６日に佐藤裕一教諭が１学年の「水溶液の性質」（理科）で公開授業を行った。

１０月１７日内田達雄教諭が３学年の「地方の政治と自治」（社会）で公開授業を行った。

イ　自ら考え自分の夢を語ることができる進路指導の実践

a　学級活動の研究授業と授業研究会

進路指導の授業実践を通して自ら考え自分の夢を語ることのできる生徒を育成することができると考えてキャリア教育の視点に立って指導案を作成し研究授業を行った。授業研究会ではキャリア教育との関わりについて協議を行った。

１０月２２日に落合賢一教諭が進路指導の研究授業を行った。単元は「将来を見通した進路選択をしよう」。キャリア教育の視点に立って指導案を作成し、授業実践を行った。

b　総合的な学習の時間の研究授業と授業研究会

ライフスキル教育は「心の成長と感情のコントロール」の育成を目指すものであり、キャリア教育の取組に不可欠であると考えて授業実践を行った。

１０月２４日新井祐策教諭がライフスキル教育の研究授業を行った。単元は「言動が他者に与える影響」。キャリア教育の視点に立って指導案を作成し授業実践を行った。

（２）　キャリア教育と関連づけた基礎的・汎用的能力を高める行事への取組

ア　小規模校の特色を生かした教育活動の取組

具体的な行事の中に生徒の活動場面を設定し、小規模校の特色を生かした教育活動を実践する。キャリア教育との関わりを意識して指導を行うことにより「自ら考え、自分の夢を語れる生徒の育成」を目指した。

具体的な行事

離任式　宿泊体験セミナー　社会体験チャレンジ　小・中合同運動会
小・中ふれあい祭り　神楽の伝統継承　生徒朝会　床ピカ運動

４　成果

研究授業や公開授業で授業の充実をはかり、キャリア教育を意識した日常の授業を実践することで生徒の関心が高まり職業観・勤労観の育成を図れた。また、全教科と領域で授業を実践することで偏ることなく４つの能力を指導することができ、体系的・系統的にキャリア教育を推進できた。

５　課題

行事における系統的な指導をより推進するために、全体構造図を作るなど行事ごとの関連性を明確にする必要がある。

（担当　教諭　内田達雄）

学力向上と豊かな心の育成
ー　種をまき、水をやり、しっかり見届ける教育　ー

秩父市立荒川中学校

１　研究の概要

本校では、上記研究主題のもと校内研修を進めている。これは、荒川地区小・中三校共通のものであり、小・中のギャップを取り除くと共に、同一歩調で研究を進める意図を持っている。また、副題に「学校教育目標　実践への基本的な考え方」を取り入れ、本研究の道筋とした。今年度は、３つの研究組織（「言語活動の充実」「心の教育」「学力向上」）を中心に、より具体的な実践に取り組んだ。

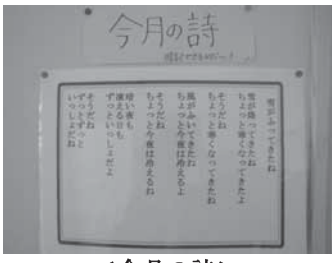
２　各部会の研究内容

（１）「言語活動の充実」部会

美しい言葉に触れることで、心を豊かにすると同時に、言語能力を高めさせようと、以下の取り組みを推進している。

ア　「今月の詩」…毎月、生徒の状況を考えながら詩を選び、朝会や学級で紹介するとともに、全学級と廊下に掲示している。

イ　読書活動の推進…図書室を整備し、開室回数を増やすことで、本に興味を持つ生徒が増えてきている。図書委員会と連携して、読書冊数調べや１人１冊運動を行った。図書委員による朝の読み聞かせも試みた。



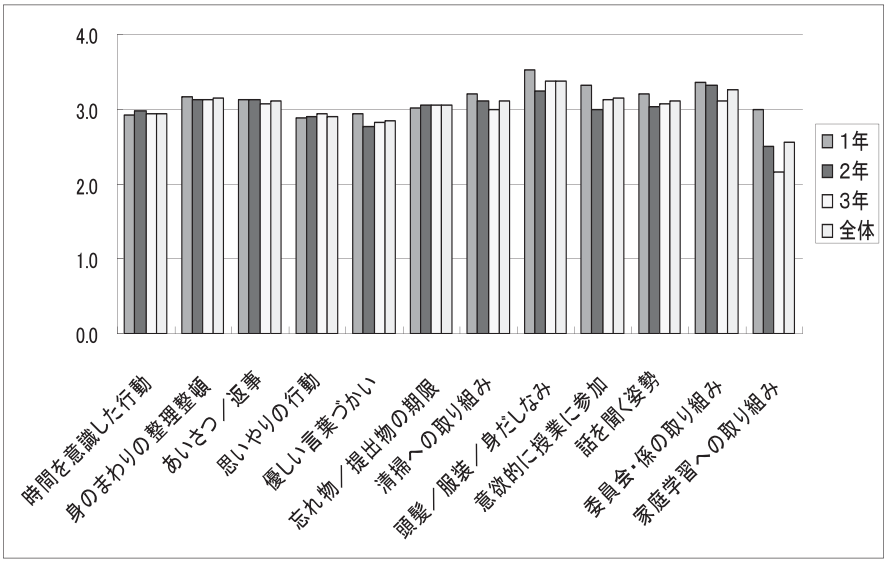
＜今月の詩＞

ウ　委員長サミットや委員会発表の充実…生徒会と委員長が集まり、荒中をより良くするための方策について、積極的に意見を出し合う場を設けた（年６回）。また以前からある委員会発表（生徒朝会）の発表の仕方についても検討し、指導している。

（２）「心の教育」部会

規律ある態度を身に付けることによって豊かな心が育ち、他を思いやる態度の育成につながると考え、以下の取り組みを行った。

ア　自己評価シート…毎月末に生徒に記入させる。クラスの集計結果をもとに学級委員会で「よくできたこと」と「今後の課題」について話し合い、翌月の行動目標に取り入れている。また、集会で学級委員会から長期休業中の過ごし方についての呼びかけを行い、全校生徒の意識の向上を図った。



＜自己評価シート分析結果＞

イ　不登校や特別支援教育への取組…全職員で共通理解のもと、指導に当たっている。

（３）「学力向上部会」

ア　「本時の課題」を明確にした授業モデルの作成…全授業で生徒に「本時の課題」を提示することを徹底した。

イ　「聞く」「考える」「話し合う」「発表する」「まとめる」を明確にした授業案モデルの作成…教師の指示を端的かつ的確に伝えることで、生徒は主体的に授業に参加でき、理解につながると考えた。「指示ボード」を活用しながら教師の指示の出し方を工夫し、授業の充実を図っている。英語（高橋教諭）と社会（清水教諭）の研究授業を通して、研修を行った。

ウ　Ara-chu ゼミ…定期テスト前の放課後に自ら学ぶ機会を設け、学ぶ楽しさや達成感を味わわせることによって学習意欲を高めると共に、一人一人にきめ細かな指導を行い、学習習慣を確立させる。今年度は新たに「ボランティア先生」を導入し、生徒同士による教え合い活動を試みた。「友達だと質問しやすい。」「教えることで逆に自分の勉強になった。」等、よい効果が表れている。

Ara-chuゼミ
＜ボランティア先生との教え合い＞

エ　がんばろうキャンペーン…定期テスト前1週間実施している。クラス毎に一人当たりの平均学習時間を算出することで、各生徒が自分の学習状況を確認し、目に見える努力目標の一つとする。

３　その他の取組

（１）小・中連携の取組

今までの取組を深め、さらなる小・中の連携に努めた。

ア　共通資料「家庭教育重点ポイント」を活用し、中１ギャップの軽減を図る。

イ　出前授業を実施し、小・中教育課程のつながりを意識するとともに、授業技術の共有を図る。

小・中三校合同研修会
＜ライフスキル教育＞

ウ　お互いの授業を参観し合い、生徒理解や情報交換に役立てる。

エ　夏季休業中に三校合同研修会を行い、教員同士のつながりを強化するとともに、荒川地区の実態に応じた研修を行う。今年度はライフスキル教育の授業モデルの研修を行い、共通理解を図った。

オ　夏季休業中の小学校のサマースクールに中学生が参加し、学習補助を行うことで、児童と生徒の関わりを持ち、中１ギャップの軽減を図る試みとした。

その他、入学説明会や１日体験入学、伝統芸能発表会の参観、小・中連絡会を行っている。

（２）学力向上具体計画

授業のチェックポイント、各教科の具体的な取組、教育活動全般における取組について、具体計画を作成し、実践している。全体で共通して取り組む内容だけでなく、他教科でどんな取組をしているのかを把握することによって、連携をとりながら進めることができた。

４　研究の成果と課題

「本時の課題」を明示した授業の展開は全教科で定着してきた。目当てをしっかり意識することで、生徒も学習内容を理解しやすく、学力向上において効果が表れてきている。また規律面においても「心を育てる」取組によって、以前に比べ落ち着いた生活ができるようになった。しかし、「家庭学習」はまだまだ十分とはいえず、保護者や職員だけでなく生徒自身も「家庭学習時間が少ない」と感じている。各教科で課題の与え方を工夫しながら、効果的な家庭学習ができるよう、学校全体で取り組んでいきたい。（担当　教諭　大澤由美子）